がないので，読者の多くは実感する機会がないだろうが以下の指摘は最近私が痛感するところである．つまり，「現在では，研究分野でも個人の研究者と機関研究者の間には大きな隔たりが生まれてしまい，ランに関するあらゆる研究や出版，そして学名の命令までも，一部の権威ある研究所の支配下におこうとしている趨勢があるようだと，ランの世界の多くの人が指摘している」，という部分である．これを開発途上国の植物学者は「科学的帝国主義」と呼んでいるという．

この問題は単にランだけの問題ではない．日本はこの分野でまったく蚊帳の外であろう．劣悪な施設しか持たない日本の研究機関の現状では，ここでいう科学的帝国主義の仲間には到底入り込む余地がない．私はだからそういうのではない．研究の自由は保証されるべきだと思う．本書を読みながら私はセント・ルイスの国際植物学会を前に盛んにメールでやり取りされた新名登録の問題を思い浮かべた．それはともかく植物遺伝子資源を巡る凄まじい争奪戦が臨場感をもって記述されており，本書は読み応えがある．

もう一点，「ラン泥棒」とされた人々の多くが実は真にランを護ろうとしている人たちで，地位も権威もある「保護論者」たちのなかに，「学術研究」の名目でワシントン条約の許可証を悪用し，ランを不正に入手している者がいる，ということが指摘されている．この指摘に該当しそうな本書での登場人物をかなり知っている私は，これを複雑な気持ちで受け止めたものである．うすうす感じていた人は多いだろうが，こういうデリケートな問題をはっきりと明言した勇気は尊重すべきだろう．この点で本書は自然保護のあり方にも一石を投じる問題提起になると思う．

そういことを書いた後に，キューのGribbやライデンのEdo de Vogelといった国際的ラン研究者の名前を出すのは気がひけるが，著者と彼らのやり取りは興味深い．東南アジアのランに大きな貢献を果たした外交官，Gunnar Seidenfadenとのインタヴューは彼の人柄が彷彿としてくる．

私はこれを翻訳でのみ読んだので，翻訳の正確さや良し悪しにコメントできないが，とても魅力を感じた．ただ，オランダ人Edo de Vogelのエド・デ・ヴォーゲルの読みはいただけない．どう表記するかむずかしいが，フォーホだろう．　（大場秀章）

□塚谷裕一：**蘭への招待―その不思議なかたちと生態**　219 pp. 2001.　集英社．　¥680（税別）．

*Arabidopsis*を中心に葉の発生や形態形成を遺伝子レベルでの解析を含めて研究する著者はまた，多才の人で，これまでにも植物に関連した多くの著書を著し，ファンも多い．野生植物にも詳しい彼が中でも関心を示しているのがラン科植物である．ヒマラヤ植物研究では調査隊が収集したラン科植物の同定を分担している．

本書は，集英社新書という最近登場した新書の中のひとつ（74）で，著者が集めたあまたの情報からラン科植物のもつ魅力やその特色を，専門外の人にも判り易く伝えることを意図して書かれた読み物のようにみえる．記述はいたって平易で，術語は極力は使わないばかりか，ときには品位に欠ける俗な表現も随所に顔を出す．この有り体の気取らない書き方が本書を一層親しみ易いものにするのに成功している．こういう点が，著者の巧さでもある．本書は植物の多様性を研究する専門家にも有益である．植物を見る目の確かさ，斬新さには学ぶところも多い．私事で恐縮だが，かつてランだけには手を出すなとT先生から戒められ傍観してきたが，周囲のラン研究者からも誘われていくつかのラン科植物の論文に名前を連ねることになってしまった．本書の著者とも最近ヒマラヤのラン科植物についての覚書きを発表したばかりである．それで余計思うのだが，ラン科植物にはmaniaとphorbiaという人の受容に両極が存在する．これは他の植物では稀有なことに思う．本書はmania側からみたランだが，phorbiaの側からみたラン書というのも興味深そうだ．著者はこれをどう思うか，知りたいところでもある．　（大場秀章）